

今日は振起日です。元々は欧米の教会でラリーデーとして覚えられてきた日です。ラリーとは、ある目的のために再び呼び集め、陣営を整え直すという意味の言葉です。

今日お読みしている箇所も、教会が新しい地に導かれ、伝道の旅を歩み直す箇所と言えます。パウロ一行は伝道の幻に導かれ、絶対に越えるわけがないと思っていた海を越え、ヨーロッパに福音を宣べ伝えることになりました。そこには、神様に備えられていたとしか思えない出会いがあり、洗礼に導かれる人が起こされ、教会の基盤が築かれました。

一方、同じ場所で、牢獄に閉じ込められることもありました。しかしそのことで、牢獄の中で過去に縛られ、未来が閉ざされ、暗闇の中にいた人たちに天からの慰めが流れ込み、看守は家族と共に洗礼に導かれることになりました。

私たちは、洗礼を受けた時点で皆、イエス・キリストのものとされます。その後の信仰生活の中では、力が与えられて色々な事ができる時があるでしょう。一方、力が取り去られて、何の役にも立てないと思えるような時もあります。しかし、どのような時も、イエス・キリストのものであるという事実は変わりません。力あるときも、弱さの中にある時も、そのような私たちに主が働いてくださり、用いてくださいます。

パウロたちも、これまでの伝道の旅の中で、その事実を知らされて、新しい場所に移っていききました。新たな地で何をしたか。これまで通り、聖書に基づいてイエス・キリストの福音を伝え続けました。具体的には、「キリストは必ず苦難を受け」「死人の中からよみがえるべきこと、また『わたしがあなたがたに伝えているこのイエスこそは、キリストである』」(3節)ことを宣べ伝えました。

聖書を通して語りかけてくださる神様の言葉は、曖昧で形のないものや、一時的に心理的な癒しをもたらす程度のごまかしの言葉ではありません。この歴史上で本当に起こったこと、あの十字架で死んだナザレのイエスこそが、私たちのキリスト(救い主)だ、という事実から来る慰めと希望です。

しかし、これを聞いた当時のユダヤ人たちは、主イエスを救い主として受け入れることができませんでした。私たちにも通ずる思いかもしれません。もし救い主なのであれば、私をこの苦

境から救い出して名誉を回復させ、繁栄させてくださるはずだ。気がつけばそう考えてしまう。

しかし、聖書はそのような単なる繁栄を救いとは呼ばないのです。悩みや苦しみ、不条理、死。それらすべてを背負って死んで復活してくださった方がおられて、そのお方が私たちを愛し、ご自分のものとしてくださる。このお方にとっては、私たちが抱える悩み、苦しみ、不条理、死、それらがもう無意味なものとは言えなくなってしまう。そういうものがなお残る私の人生も虚しいとは言えなくなってしまう。むしろ、それらを抱える私たち自身とその人生を、主がご自分のものとし、主が働いてくださって、主の栄光を現すものとしてくださる。この約束を救いと呼ぶのです。

パウロたちも、今日の箇所を読んだだけでも順風満帆とは言えない歩みです。迫害にあいました。妬まれました。しかし、それらを貫くようにして、神様の業に用いられていったのです。今日の箇所では、教会の核となって、パウロたちを熱心に助け、共に働く仲間が与えられた様子が伝えられます。その多くは「兄弟たち」と記されるだけの無名の人たちでした。

私たち大阪教会の歩みも、まさにそのようなことの連続でありましょう。先週から葬儀が連続し、結婚式もありました。その度に、共に仕える兄弟姉妹たちが次々と起こされて、感動していました。その仲間たちは、この地にある兄弟姉妹だけではありません。すでに天に移された兄弟姉妹たちも、なお神様に用いられて、この歩みを共にしておられます。私たちは、それほどに絶大な光の中へとすでに招き入れられているのです。何も恐れることなどありません。

今日は振起日です。改めて聖書を共に開く日々を、今日ここから始めたいと思います。聖書を開いて、イエス様が私たちの救い主でいてくださる事実を日々新しく受けとって、尽きることのない希望と平安と慰めとに支えられて歩んでいきたいと思います。今も天にある教会、地にある教会に繋がっている私たちを通して、生きて働いていてくださる主への信仰を新たに振るい起されて、力溢れる時も、力のない時も、それぞれの仕方で用いられる、そんな主の伝道の旅路を共にしていきたいと思います。